

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
自ら学び、自ら行動する、心豊かな岩松っ子の育成	① 地域に開かれた信頼される学校運営 ② 確かな学力の定着 ③ 豊かな心と健やかな体の育成

達成度
 A: ほぼ達成できた
 B: 概ね達成できた
 C: やや不十分である

3 目標・評価

① 地域に開かれた信頼される学校運営

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	
学校運営	学校教育目標	学校教育目標、重点目標が周知されたか。	・教職員、児童、保護者、学校評議員、地域への周知を図り、認知度90%以上を目指す。	・教職員は職員会議で、保護者、学校評議員、地域の方々には育友会総会や学級懇談、学校便り、HP等で説明する。	A	学校評価の保護者アンケートでは、「A評価: 思う37%」「B評価: 大体思う56%」を合わせると93%になり、よい評価である。また、学校評議員会の開催や学校便りの発行は予定通りにできたし、学校評価計画表や学力テストの分析結果など保護者に情報提供すべきものは、大体達成できたと思うから。	・経営方針などの校長の考え、日常の学校行事や子ども達の様子など情報提供は、学校便りを中心に大体できたと思う。	・HPにおける毎月の学校行事や子ども達の様子に関する更新は、予定通りにいかなかった。掲載材料を用意し、ICT支援員をうまく活用して、定期的な更新に努めていきたい。
	危機管理	児童の安全・安心が確立できたか。	・学校安全計画を基に安全教育を進め、安全指導を確実に実践していく。 ・安全・安心に配慮した教育活動が実践されていると感じる保護者を割合で評価していく。	・実態に即した緊急時対応マニュアルの更新 ・実効性のある避難訓練を実施する。 ・毎月の安全点検を確実に実施する。	A	学校の安全教育・安全対策に95%の保護者が理解をしてくれた。	学校の取り組みは、保護者に理解してもらっているが、児童の安全に対する意識を現在の70%から90%へ増加させたい。	実効性のあるマニュアルの作成を養護教諭、生徒指導、事務室等と連携して取り組みたい。また、防犯教室等を実際を想定しての訓練にしていきたい。
	開かれた学校づくり1	学校情報を提供できたか。	・学校の情報が分かると感じる保護者の割合が85%とする。 ・学校公開日、行事、授業参観での出席率を85%以上に上げる。	・学校だよりを随時発行すると共に、ホームページを着実に更新し、学校の情報を発信する。 ・学校公開や授業参観を毎月実施する。	B	学校の情報がよく伝わっている・伝わっていると保護者が96%にのぼっているが、実際に参観等に来校する保護者等は80%前後にとどまっている。	情報の伝達はよく行っているようだが、参観者数の増加につながっていない。	土曜開校日を活用し、参観授業の内容を工夫し、来校者数を増やしていきたい。情報伝達の手段として、学校情報メールの100%受信をめざしていきたい。
	開かれた学校づくり2	地域の教育力を活用した充実した体験活動ができたか。	・地域の教育力を活かすことで、体験活動による成果が上っていると感じる保護者が90%以上とする。	・総合的な学習、生活科の年間計画に地域性を活かした体験活動を位置付ける。 ・水と土づくり探検事業の実施。(全学年) ・岩松寺小屋と岩松検定の実施。	A	すべての活動においても、地域の方々と連絡を密に行い実施することができた。回を重ねてきているので、段取りもよくなり、工夫を加えられ活動がより学び多いものとなった。 学校評価のアンケートでも、児童・保護者とも高い評価を得ることができ、活動の様子等保護者にも伝えることができた。	岩松校区の子どもたちにとって身近な存在である自然や農業による生産活動を地域の方やその分野に詳しい方の支援を得ながら体験活動や学習を進めることができた。この学習を通して、学習内容はもとより支援していただいた方々とのふれ合いも子どもたちにとっては大切な学びとなった。野菜づくりでは販売にまで至ることで生産活動の新たな興味もわき、地域の方とのふれ合いも広がりが生まれた。	担任だけでは、連絡調整等が難しい面があるので、級外が仲介に入り円滑に進められる様にしていける。学年が変わっても、担任が見通しを持って活動が進められる様に、年度初めに出す年間の行事に挙げておく。

② 確かな学力の定着

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	児童の基礎学力が定着したか。	・全国・県学習状況テストが県平均を上回る。 ・CRTテストの結果が、全学級で全国平均値を上回る。	・スキルタイムや長期休業中の学習内容及び支援計画画的に行われた。 ・家庭学習の充実を図るため、家学週間に学期毎に設け「学年に応じた家庭学習の時間の達成」に取り組む。 ・育友会と連携し家庭教育講演会を開催する。	A	・4月の学習状況調査結果を活かし、該当学年だけでなく全学年に取り組みを行うことができた。12月の学習状況調査では、県平均は12科目のうち11科目は越えることができ、十分達成に目標以上に近づいたことができた。初参加だった4年生も5・6年生と同じく結果を出すことができた。 ・12月の学習状況調査も目標を達成できる成果が上がった。	・家学週間で学習時間は多くの児童が達成できたものの、宿題が習慣化できていない児童が数名いる。また、自学の定着や内容のレベルアップに向けての取り組みや支援も必要である。保護者への協力やおすすめの自学内容等の提示等をさらに進めていく。 ・B問題に日常から計画的に取り組めるように、問題の収集と実施計画を提示していく。
	●教育の質の向上に向けたICT活用教育の推進	教職員のICT利活用能力は向上したか。	・ICTの授業への利活用を推進し、分かる、楽しい授業を進めていく。 ・授業にICTを活用できる教職員の割合を100%にする。	・講師招聘による校内研修の充実を図る。 ・電子黒板・タブレット型PCを中心にICTを有効に活用する指導法を研究する。 ・有効な活用方法、有効な教材作成など情報交換をしながら蓄積していく。	A	・電子黒板の利用率はほぼ100%である。 ・タブレットPCを活用した授業も全学級で行うことができた。	・ICTと黒板やノートなどのアナログ媒体との効果的な使い分けについての研究を継続する必要がある。 ・タブレットPCを学び合い学習の中に効果的に位置付けるための研修・実践を維持していく。
	読書活動	読書活動の推進ができたか。	・図書館と連携し、児童一人当たりの貸出数を150冊以上に上げる。	・読書ボランティアの読み聞かせの実施。 ・魅力ある図書館にするためのイベントなどを工夫する。 ・読書リレーの実施。	A	・年間の一人当たりの貸し出し数の目標を150冊にしていた。昨年度に比べると、貸し出し数も増えており、1月の時点で、一人当たりの累計が、平均136.83冊である。3月までに目標の平均150冊に到達できそうである。	昨年度に比べると、1月の時点で、累計前年対比106.71であり、貸し出し数は、伸びている。図書館での催し物に積極的に参加したり、ひまわりチケット(プラス1冊)、はなきんチケット(プラス2冊)などを使ったりすることで、本をたくさん借りることができていた。

③ 豊かな心と健やかな体の育成

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策	
教育活動	●心の教育1	学ぶ喜びがあり、認め合い支え合う学級・学校づくりができたか。	・学校が楽しいと感じる子どもの割合を90%以上にする。	・児童に出番や役割を与え承認していく機会を増やすことで、自己肯定感を高めながら支持的風土を醸成していく。 ・「さん」「くん」を付けて名前を呼ばせたり、「ほかほか言葉」を積極的に使わせたりすることで、言葉遣いを整えていく。 ・QUTテストを活用した学級経営。 ・あいさつ運動の展開。	A	・児童アンケートで「学校が楽しい」の割合が93% ・保護者アンケートで「子供が学校が楽しいと感じている」の割合が94% ・教師アンケートで「認め合い支え合う学級作り・支持的風土の醸成に取り組んでいる」の割合が93% ・QUTテストの結果が、全学級、6月よりも12月のほうが良くなっている。(安定した学級になってきている。)	・計画的かつ状況に応じて適宜手立てをとっていったことで、学校が楽しいと感じる児童の割合を9割以上にすることができた。 ・QUTテストの結果から、すべての学級において、「友達関係」「学級の雰囲気」「学習意欲」の3項目が全国平均以上または全国平均並みであった。加えて、3項目のバランスがとれており、どの学級も安定した集団となっている。	「さん」「くん」をつけて名前を呼ぶことや「ほかほか言葉」を積極的に使うことなどの定着が不十分であった。全職員が同じような基準をもって全児童の指導にあたっていくことで改善を図ってきたい。しっかりと定着するには、数年間かかると思われるが、粘り強く取り組んでいきたい。
	●心の教育2	自問清掃の取組を通して、児童の姿容はみられたか。	・自問清掃を頑張っていると感じている児童の割合を85%以上とする。	・講師招聘による職員研修を実施する。 ・がまん日記を書かせ、それを基に指導を続けながら定着させていく。	A	アンケートの結果から具体的目標では、85%以上になっているが今年度は、89%になっていることから今年度は、達成といえる。	学校評価・児童アンケートでは、89%の児童が「自問清掃」や「みつけ掃除」ができていると答えていることから、自問清掃を頑張っていると感じている児童の割合が多い。今後もがまん日記を掃除の後に書くことで掃除の振り返りをしたり校内に掲示コーナーを設け児童の掃除の様子を掲示したりすることで掃除に対する意識を高め自発心や自立心を育てていきたい。	掃除の時間は、自問掃除の取り組みで、校内が静かに掃除できた。各教室・ワークスペース・特別教室・体育館など無言で掃除をする児童の姿を多く見ることができた。「がまん掃除」では、自分でやり通そうという意識が深まったようだ。反面、掃除後の毎日の日記内容が同じ文になってしまうので、「みつけ掃除」「しんせつ掃除」などよく書けている日記を特活など、授業の資料として活用していくことで自問清掃の定着につなげていきたい。
	・特別活動	児童会活動の充実	代表委員会や各委員会で決めたことについて、一人ひとりが出番・役割を意識し、進んで取り組むことができる児童を85%以上にする。	児童会行事や代表委員会、各委員会活動等で児童(学級集団)が自主的に出番を作り活動する機会を保障する。	A	・学校評価アンケートにおいて、委員会や係活動などで、自分の役割を果たしている自己評価している児童の割合が95%であった。子ども一人ひとりに役割を考えさせたり、出番を作らせたりする機会をできるだけ多く設け、自主的な活動のできる時間を計画的に取ることができた。	・各学級において、係活動の工夫がなされ、一人ひとりの活動の場を保障できた。 ・すこやかタイムで、全委員会の委員会発表を行うことができ、一人ひとりが自分の役割を果たした。 ・児童会目標の「まごころをこめてあいさつをする」について、あいさつ運動を行った。各学年ごとにあいさつ運動を行うことができた。 ・わんぱくタイムでは、6年生を中心に、異学年交流ができた。	前年度の活動を参考にしながら、子どもの自主性をはぐくむことのできる支援の仕方を工夫する。
	・特別支援教育	特別支援教育体制の確立と充実ができたか。	・校内支援委員会等を通して、対象児童の共通理解を図り、よりよい支援体制をつくりをめざす。	・校内委員会を設置し、状況に応じた校内支援体制をつくり、対象児童への支援を行う。 ・特別に支援が必要な児童の支援に関する校内研修を実施するとともに、対象児童の個別の指導計画を確実に作成する。	B	・支援を要する児童や学級について、その都度話し合いを持つことで状況は改善している。 ・学校全体で支援の状況を共有できているかというところ、もう少しという思いがある。	・配慮を要する児童については、気になることや問題が発生する時期が決まっているわけではないので、その都度なるべく早めに対応することを心がけた。その結果、少しずつではあるかもしれないが、いい方向に向かっていると思われる。	・年間の流れをよく理解できていないことで、先生方への提案が早くできないことがあった。 ・月1回の生活指導会の中で、生活のことと別枠でクラス全体のこと、気になる児童のことなどもう少し時間をとり、職員全体で共有すべきではないかと思う。
	●健康・体づくり①	規則正しい生活習慣の推進と健康な体作りができたか。	・十分な睡眠時間の確保と、朝食を毎日食べる児童の割合を85%以上にする。	・「岩松つ子カード」により、規則正しい生活習慣の実態把握をし、適宜指導を行う。 ・養護教諭、栄養教諭を中心に、規則正しい生活習慣や食育に関する指導を推進する。	A	・計画していた活動をすべて実施できた。 ・睡眠時間と朝食に関するアンケートの結果、よくなる児童の割合が89%と目標値85%を上回った。	・岩松つ子カードの実施で、生活習慣に対する実態が明らかになると共に、児童の生活習慣に対する意識が高まった。 ・養護教諭、栄養教諭で全クラスに食と健康に関する指導を行った。	・岩松つ子カードを実施して睡眠や食事など生活習慣については、家庭生活の状況なので、保護者を対象にした指導が必要と考える。(テレビの視聴時間など)
	●健康・体づくり②	健康な体作りができたか。	・体力作りにつながる活動を朝や行間の時間に実施する。	・ラジオ体操週間やマラソン週間、なわとび週間で実施する。	A	・計画していた活動をすべて実施できた。 ・体力づくりのアンケート結果、よくなる、できるの割合が90%を超えていた。	・ラジオ体操・マラソン週間・なわとび週間を実施し、児童の体力向上につながった。 ・祇園川ロードレースの実施で、児童の運動に対する意欲が向上した。	・マラソン週間の実施時期を変更したので、来年度は、短縮校時との兼ね合いを考えて、実施時期を決めたい。 ・祇園川ロードレースを年間計画に位置付けるようにする。
	●いじめ問題への対応	いじめのない学級づくりと教育相談体制の確立ができたか。	・全ての児童が、「いじめられていない」と感じるようにする。	・「いじめゼロ宣言」に基づく取り組みを各学級で実践する。 ・毎月の教育相談会でのいじめに関する共通理解を図り、いじめ相談やいじめに関する指導を行う。 ・友達アンケート(「月の心」)を月1回実施し、情報を収集していじめの早期解決を期する。	B	・児童アンケートで「いじめをしていませんか」の項目で、「あまり思わない・思わない」を合わせて15%だった。保護者アンケートでも、「いじめ防止の取り組みの成果が出ていると思うか」の問いに、「あまり思わない・思わない」を合わせて19%という結果だった。このことから、具体的目標にあげているすべての児童がいじめられていないと感じられるような実態には到達していないと考えられる。しかし、早期対応や予防的な活動などである程度の効果があがっているものと考え「B」とした。	・「いじめゼロ宣言」を各教室で読んだり、昼の放送で毎日「今日からは、いじめ防止しよう」と呼びかけをしたりして活用したことで、意識づけになった。 ・SCの活用が大変充実しており、毎月1回の相談で心の安定が図られている児童が多数いる。保護者の相談の要望にも、臨時的に別の学校での相談に入れてもらうなどすばやく対応でき、早めの対応が児童の早期解決につながった。児童へのエンカウンターや授業ができたのもよかった。 ・養護教諭の情報収集から、担任へのすばい連絡・対応につながったケースが多々あった。	・すぐに結果が出るのが難しい項目であると思うが、「いじめアンケート」などを定期的に(学期に1回や年に1回など)行い、これまで以上に早期対応や日々の声かけの積み重ねが大切であると考える。 ・「人権教室」を1、2ヶ月に1回ほど低・中・高学年別に行い、全職員をふりわけて話し、人権意識を高めることも検討してみたらどうだろうか。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

- ・保護者アンケートからは、ほとんどの項目に目標値を上回る評価を得ることができた。また、4部会を中心に全職員が共通理解を持って学校教育目標の実現に向けて取り組むことができた。
- ・一番評価が良かったのは、開かれた学校の項目で、学校の様子がよくわかるという評価をたくさん保護者からいただいた。今後もより一層充実させていきたい。
- ・ICT利活用については、タブレットPCの利活用に焦点を絞り、校内研修を中心に全職員で取り組み実践を積み重ねてきた。今後はこれをわかる授業、学力向上へと結びつけていくことに努めていきたい。
- ・自問清掃や、読書活動などは学校での児童の姿と家庭での姿とがややちがうようで、実績よりも家庭の評価が低い傾向が見られた。来年度は家庭との連携で生活に生かせるような取り組みを進めていきたい。
- ・来年度はPDCAサイクルを各部会で積極的に取り組み、今回の評価から新たな計画、実行、そして再度の評価というところを教職員主体で取り組んでいきたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目